

東京に生まれ、緑少ない都会で育った。初めて日本庭園を見たのは、中学の修学旅行で京都を訪れたとき。大きな池があり、しんと石が佇む。その静寂が、歩き疲れた心にぴたっと合い、とても感動した。

庭への憧れから、「深く庭を知りたい」と思うようになり、京都へ。大学で庭園の歴史を学び、ご縁を頂いて植彌加藤造園に入社。嘉永元年(1848年)創業で、南禅寺をはじめ東本願寺、智積院、金戒光明寺などの御用達を務めている会社で、近年では文化財の修復から国内外の現代的な日本庭園の施工まで数多く手がけてもいる。その長い歴史のなかで今、自分が庭にいて、庭の歴史を未来につなぐ仕事に就いていると思うと、背筋が伸びる思いだ。

入社して3年。除草や掃除を中心に、先輩について庭をまわる毎日だ。夏は暑く冬は寒い庭師の仕事。力仕事で、虫にも刺される。でも、好きな仕事だから、庭にいられるのが幸せだ。

今、私が最も深く関わっている庭は、京都・岡崎の無鄰菴。もとは山縣有朋の別邸であり、その庭は東山を借景にした名園だ。琵琶湖疏水から引き込んだ流れや三段の滝など、見所は多い。季節ごと・時間ごとの光の変化で、庭が違う表情を見せるのも魅力的だ。

無鄰菴の芝生には、さまざまな野花が咲く。一般的な庭園管理では、野草は取り除くもの。無鄰菴では、山縣の想いを引き継ぎ、野花を生かした庭づくりをめざしている。私はここで野花の調査を担当。無鄰菴は文化財庭園ゆえ、名画に勝手に筆を加えられないのと同様に、新しい野花の種を蒔いたりできない。庭園本来の景観に近づけるために、明治時代の写真や資料を研究し論文を書き、現代の庭づくりとのバランスを探る。図鑑で野花の名前を調べ、写真を撮り、観察を続ける。庭園の歴史を読み解き、世に発信するのも私たちの役目だ。庭をご案内するツアーで、野花を介してお客さまと会話が弾むのも、楽しい。

けれど修業は始まったばかり。まだ樹に登らせてもらえる機会も少ない。剪定修業もこれからだ。枯れ葉や枯れ枝の除去も掃除の一部。掃除ができるようになるにも10年かかると言われるほど、庭師の仕事は奥深い。大切にしているのは「初心」。つい目の前の仕事に追われがちだが、初めて庭を見たときの感動を忘れずにいたい。早く、そして深く技術を身につけ、一人前の庭師になりたい。そして、初めて庭を見たあの感動を多くの人に味わってもらいたい。📷

庭の歴史を 未来へつなぐ

半田さなえ 庭師



無鄰菴庭園

Sanae Handa

はんだ さなえ

1992年東京都生まれ。京都造形芸術大学卒。大学で日本最古の庭の指南書『作庭記』を学び、2015年植彌加藤造園入社。無鄰菴で野花を担当。研究論文「『名勝無鄰菴庭園』の本質的価値を見つめた庭園管理―山縣有朋の愛した野花を生かした芝生管理のあり方」で2016年度日本造園学会関西支部賞受賞。なお同社は無鄰菴のほか岩倉具視幽棲旧宅やけいはんな記念公園の指定管理業務、南禅寺、東本願寺、智積院など名勝庭園の保存修理事業、民間では星のや京都の庭園の育成管理など多数手がけている。

<https://ueyakato.jp/> <https://murin-an.jp/>

季刊 [やく] December 2017 | No.33

C O N T E N T S

02 Person 人・明日をつくる

庭の歴史を未来へつなぐ

半田さなえ

03 [鼎談] 基軸を探る

世界のエネルギー・環境情勢と 2018日本の進路を考える

有馬 純／石原慶一／高村ゆかり

18 オピニオン

エネルギー・環境への視点

環境

「CO₂排出ゼロへ、世界観を覆す大転換を」江守正多

原子力発電

「2030年のその先へ、新增設に着手すべきとき」渥美寿雄

高レベル放射性廃棄物

「地層処分へ、膠着状態打開への一歩」佐々木隆之

25 旬発 NIPPON

2025年万博の大阪・関西開催に向けて

29 かんてん FOCUS

低炭素社会の実現に向けた挑戦

河上 豊

34 現場力ノ最前線

全国初! 大規模帯水層蓄熱利用の
実証事業を実施